

Accounting, Arithmetic & Art Journal



The PACIOLI SOCIETY JAPAN

2017. 04

◆ バランスの思想と複式簿記

国士舘大学名誉教授 山崎弘之

目次

- 1 . はじめに
- 2 . 経済学は演繹を要請する
- 3 . マクロ経済学は演繹論にあらず
- 4 . 幾何学からはじまった数学の意義
- 5 . 古代哲学者のアナロギアに含意された等比概念
- 6 . ルカ・パチョーリが複式簿記に込めた精神
- 7 . むすび

1 . はじめに

私は経済学（経済学史の分野）を専攻する一学徒である。したがって、会計学や簿記論は傍証的立場から見ることになる。それにも拘わらず、ルカ・パチョーリに言及を試みたのにはそれなりの理由がある。もとより、経済という広い立場から見ればそれほどの乖離感をもつ必要はないのかもしれない。幸いと言おうか、学問はその歴史を遡れば遡るほどに、諸科学間の隔たりは縮まる。考えてみれば、日本人はしばしば自然科学と社会科学（や人文科学）との間に厳密な区分けをする。しかし西欧の学者はそれほどの区別をしない。そもそも学問は最初から（今で言う）学際的であった。そのような姿勢からそして経済学から簿記原理に焦点を当ててみたのである。ルカ・パチョーリ（Pacioli, Fra Luca 1450?-1520?）の中世時代を見ると、筆者でも論述が可能と思われたのである。それどころではない、新たな発見を提示できると考えたのである。

そもそも私の専門分野はオーストリア学派経済学である。最初の恩師・細野孝一先生は日本で数少ないミーゼスの研究者の一人であった、荒木光太郎の弟子であった。その故あってか、細野先生は私の研究事始めの質問にミーゼスの著作（*Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel*, 1912、東米雄訳『貨幣及び流通手段の理論』ⁱ⁾）を薦めた。しかし、細野先生はこと細かにミーゼスの理論

を説いてくれる訳ではなかった。原文がドイツ語であることに加えて、マルクス経済学やケインズ経済学が全盛を極めた時代で参考になる図書は皆無に近い状態であった。浅学非才のみ、苦勞の連続であった。

博士課程に入って、偶然にも一谷藤一郎先生に出会うことになる。一谷先生はミーゼスやハイエクに造詣が深く、早速オーストリア学派経済学の教を請うた。しかし、一谷先生もまたミーゼスやハイエクについて詳しく語ってくれなかった。理由は、オーストリア学派経済学は周知の通り、C.メンガーに始まり、その思想はドイツ語圏であるが故に哲学を含意した経済学であった。かなりの時間自問自答が続いたのちに、日本では哲学的な見地を持たない経済学者であるが故に、究めるには限界があることに気づいた。大変であろうが、哲学を初歩から学んでオーストリア学派経済学に挑戦せねばならないことが分かりかけてきた。

オーストリア学派経済学の背景となる哲学的視点とは、ドイツ歴史学派にも通じるが、一言でいえば、演繹論であった。この演繹とは形式論理学が言うところの帰納対演繹の演繹ではない。演繹論とは一つの包括的理念を掲げ、それに沿うべく不合理を排除する姿勢で進める方法論の一つである。いわば、演繹論とは全体論ⁱⁱである。その演繹にメンガーは福祉（幸福）を、ハイエクは自生的秩序を掲げてきた。もとより、演繹は具体的な目的をもつ理想や理念ではない。演繹には市民社会が果敢に挑戦する福祉、調和そして秩序を含意する。それはバランスの思想である。したがって、その包括的射程は当然広くなる。ハイエクはその自生的秩序に経済のみならず法や言語を入れている。

それだけにこの演繹論は簡単なことではなかった。演繹論の起源を探ると古代哲学者のプラトンやアリストテレスに至ることが分かった。演繹論はアナログア（analogia）に起源を持つ。そして、この演繹論は西欧の哲学や科学の方法論の枢軸を努めてきたことに気づかされたのであるⁱⁱⁱ。演繹論は西洋の諸科学を覆う基底である^{iv}。

その意味で、オーストリア学派経済学は経済学に新たな方法論を加えたと言えよう。この点でハイエクの貢献度は大きい。オーストリア経済学の思想はハイエクによって進展を見たと言えよう。考えてみれば、アダム・スミスもまたこの演繹論の中で古典派経済学を構築していたことが分かった^v。

さらに、その演繹論は数学（幾何学）と結びついていたことに気づかされたのである。数学は等号をもち一方の事象を他の事象と結びつける。等号はアナログア（アナロジー）で、体系や判断を含意する。既に古代哲学の哲学者・プラトンは後述のように、イデアの説明にアナログア（類比や類推）という比を用いた。その萌芽はピュタゴラス（BC582~497?）であった^{vi}。その数学やアナログアは古代哲学を育んだと言えよう。ここにルカ・パチョーリが数学者でありつつ複式簿記論を展開した理由が開けたのである。

2. 経済学は演繹論を要請する

経済とは何か、経済学を専攻すると誰もが一度は問いかける問いである。しかし、その問いがだんだんと消え失せていったのではなからうか。経済学も進化を遂げ、最近では金融工学や人的資本論等という科目に彩られるカリキュラムを目の当たりにする昨今である。一昔生産論や分配論というものが存在したが、今はまったく影を潜めている。科学が進歩、進化することに異議を唱えるわけではないが、本来持っていた社会科学・経済学の本質が忘却の彼方に消えていくことに、ある種の無念さを感じるのは私だけではない筈である。それは諸科学が哲学から乖離することを意味するからである。

スミスは経済に「見えざる手」を含意させたことは周知の通りであるが、しかしスミスは著作

『国富論』と『道徳感情論』の中それぞれで一度の叙述に留まり、誰もがその意味に今ひとつ解説の足りなさを感じてきたであろう。後生のスミス研究者達も「見えざる手」の頭に「神の」を付けたり、外したりを続けてきている。

では、経済学とは何か。経済学は（今更述べることではないが、）決して最小の犠牲で最大の効果をあげるといふ、功利主義に満ちた社会科学ではない。経済学は経国済民（経世済民）で表されてきたように、国家や社会に生きる個々人がどのようなシステムで公平に衣食住に与るかを議論する科学である。そして、究極の目的は調和（秩序）であり、幸福（福祉）である。それだけに哲学が必要であることは明らかである。

確かに、交換は消費者の豊かさを意識させ、それに応じて質の高い財を編みだしてきた。換言すれば、経済には需要と供給がなせる技（ワザ）が宿っている。交換はまさにその契機となり、我々が営む経済に限りない改善を施してきた。それによって、我々の生活はより豊かになってきた。つまり、交換はまさに個人的でありかつ自己利益に基づくが、その人間が彩る需要と供給の動機は我々の環境（生活の質）を変えてきた。我々の環境とは社会であり、全体である。しかしながら、その全体という経済はいつも安泰ではない。これまでも幾度となく大不況や何々ショックを経験してきた。しかし、その不況やショックも個人もしくは諸個人がおかした罪過である。したがって、我々は罪過を犯さない個人もしくは諸個人を求めねばならない。したがって、その地平に調和（秩序）を置かねばならない。この秩序（調和）の要請は経済や社会に全体論を要請する。この全体論を演繹論という。

また次のようにも言える。我々は徹底的に利己的である。自己の利益が最優先される。しかし、我々は次のようなパースペクティブな見方も忘れない。つまり、個人も企業も経済全体の動向を気にかけ、それに期待をかけている。これは全体論や演繹論を要請していることになる。個人と全体はある靱帯で結ばれている。あるべき個人からあるべき社会へあるアイデアを要請している。おそらく、スミスの「見えざる手」はこの靱帯を導く手を意味したのである。もとより、経済学の歴史はこの靱帯を課題してきたのである。

経済学の歴史を見てみよう。経済に交換が拡大し市場経済が余儀なくされると、均衡の理論が編み出された。均衡はある種の全体論であり演繹論である。その均衡は携わる個人は過不足なく満足、つまりウィンウィンの世界を含意していた。もとより、それは現実の不均衡の世界を無視したのではない。均衡論は十全ではないが、個々人の充足を含意している。古典派経済学も新古典派経済学もこの均衡を暗黙に当為として含意していた。あるべき姿を捉えようとしたのである。ただ均衡論は科学性に限界がある^{vii}。

こうして、経済学は均衡という名の全体論が展開されることとなった。近代経済学の誕生である。その中心人物の一人はかの有名なレオン・ワルラスである。彼の貢献は市場に均衡メカニズムを顕わにしたことにある。しかし、ミクロ的個人の満足は「希少性（rareté）」として幾つかの点で抽象化されている。企業の収益は用役に還元され存在せず、供給は用役者（地主、資本家、労働者）が必要した結果の残余である。したがって、用役者の需要に力点をおくものの供給における企業の収益（利潤）は捨象されている^{viii}。シュンペーター（Schumpeter, J. A.）をして不思議に思わせたのである。しかし、その要諦は各用役者が過不足無く満足を得る全体論にある。まさに数学と人文科学の融合を見る。

彼の経済学における功績は限界理論を用いたことにある。限界革命は古典派経済学から新古典派経済学へ新たな途を備えたことにある。つまり近代経済学の誕生である。しかしながら、筆者にしてみればもう一つ彼らの功績をあげねばならない。それは個人が捨象されることなく経済システムの中で機能している点である。メンガーは消費者を王様に仕立てて理論を構築した。

言葉を換えれば、彼らは個人に重点を置きながら、経済全体の均衡や福祉を編み出すメカニズムを探った経済学者と言えよう。それは経済学を時間論、原子論そして不確実性で見直す機会を与えた。現代にもその思想が継がれている。これは全体論の表れと言えよう。つまり、経済学に避けられない演繹論と言えよう。経済は個人におけるウィンウィンの世界であるが、同時に全体論が当為としてあがる。経済学が他の社会科学との比較において特徴とするところである。個人を重視した原子論に立ち、同時に経済全体の均衡、調和（秩序）を目指す。それは演繹論である。

3. マクロ経済学は演繹論にあらず

こうしたところに、登場したのがマクロ経済学を主導したケインズであった。彼の『一般理論』がその原理を語っている。ケインズは個人の価値論を離れて、有効需要に目を付けてひたすら需要喚起の経済学を展開した。経済に井戸のポンプに似て呼び水（需要喚起）を必要とするなら、国家財政出動も辞さない全体論であった。有効需要論はある種の演繹論（全体論）である。その需要は完全雇用となつてなお経済全体を潤すという政策は当為のものであった。ケインズの理論は稼働率の落ちた経済基盤を持つ先進国には有効なカンフルとなったことは事実である。しかしながら、それはミクロ的個人の立場が軽視される経済学となったことも事実である。経済というパイの大きさに目的が傾倒し個人の立場は希薄とならざるを得なかった。マクロ経済学はパイの規模に支配され、森を構成する木々が消えかかるのである。ロビンソンクルーソーを例に出して古典派経済学（新古典派経済学）を批判したことの裏返しである。彼の経済学はリアリズムに基づき政策を実現となった。そのリアリズムに酔いしれる人々が経済学者であり市井の諸個人である。それは今も続く。現代のリフレ派の経済学者はその流れの中にある。

こうした傾向を持たせてしまった、マクロ経済学という全体論に異議を唱えたのがオーストリア学派であった。彼らの経済学は（全体論の表現に危惧を覚えるが）既述のように演繹論である。演繹論は全体の命題に立つという意味で全体論であるが、オーストリア学派経済学の特徴は消費者を第一義的に考えていることにある。したがって、現代のマクロ経済学とオーストリア経済学とは似て非なる演繹論である。経済学の核はあくまでも消費者個人である。同時に（現代経済学の言うところの）マクロ的視点に文化や幸福をおくという全体論を持っていた。それらを支えるのは自由市場である。しかしながら、その自由市場は単なる価格が決まるマーケットではなく、確実にして開示された情報環境を指している。ミーゼスやハイエクはその自由市場をカタラクシー（catallaxy=「コミュニティに入る」）と言い換えている。

現代の経済学の現状を確認しよう。現在経済に関わる人々は学者であろうが、エコノミストも経済を有効需要とか完全雇用そして国民総生産（GDP）という見える実態の全体像で捉えている。この見えるマクロ経済は分かり易いのである。しかし、このような経済学に異を唱えてきたのがオーストリア学派経済学である。もしこのような全体像で経済を捉えるとそのパイの大きさでのみ目的が確保され、肝心の消費者個人にそれらの恩恵がどれだけ及んでいるか、という視点は軽んじられてしまう。国民諸個人の視点がマクロに移り、ミクロを遠ざけてきたのである^{ix}。

そもそも経済を数字で可視化して良いのであろうか。経済の可視化とは有効需要とか完全雇用そして国民総生産という、数字化した指標で表す規模の経済学である。もとより、諸個人がより豊かになることを妨げるものではない。しかし、その規模拡大で諸個人の目的が達成される訳ではない。経済学を進めると、その究極に幸福や福祉がある。もとより、幸福は諸個人で主観的である。その主観を包括するものは経済の規模にあらず、調和や秩序である。彼らの経済学は調和や秩序を目標におく全体論にして演繹論であった。したがって、この調和や秩序は全体の理念、イデアの世界の世界である。当初の経済学はその理念を堅持していたのだ。ここに古代哲学に遡

る下地を感じ取ることができる。

4. 幾何学からはじまった数学の意義

数学は自然科学のみならず諸科学に用いられている。我々の文明社会に数学の貢献は甚大なものであることは誰もが認める。その貢献は科学的対象における数量化にある。数量化の意味するところは対象の把握と操作である。しかしながら、西洋の学者が思念してきた数学は少々趣を異にする。とりわけ古代、中世そして近世において、学者の捉えた数学は神秘を意味し、ほぼ哲学と同義であった。数学者であるピュタゴラス (Pythagoras 前 582-497) が哲学 (philosophy) の意義を「知 (sophia) を愛す (philos)」を最初に言い出した人である。いわば西欧哲学 (学問) の始まりは彼である。その後のプラトン (Platōn 前 427-345)、アリストテレス (Aristotelēs 前 384-322) は彼の継承者である。西欧における諸学は彼らの哲学に依存すると言って過言ではない。パチョーリもそれを継承している^{xi}。

数学の嚆矢を幾何学に見よう。紀元前のピュタゴラスに始まる、幾何学^{xii}は「ピュタゴラスの定理」で分かるように、公理論であり演繹を含意する。代数が数の離散を伴うのに対して、幾何学は地理上の線分であり連続量である。連続する線分は“比”で表された。公理論は“比”によって展開された。かくして、プラトンは“比”を援用してアナロギア (演繹論) を展開した。比に美を見た、黄金分割 ($2 : \sqrt{5} + 1$) はその例である。美学の始まりである。パチョーリの「神聖な比例」^{xiii}もその類いである。この演繹論は西欧哲学を彩る認識論、倫理そして判断論の萌芽となった。幾何学が思惟の基礎に横たわることが実に興味深い。その影響は近世に至っても見られる。カントは認識論の概念形成に「図式 (Schema)」^{xiv}を用いているのはその現れであろう。また、数とは実に神秘的なものである。なぜなら抽象化を極限まで進めるからである。たとえば、ここに兎が1匹と犬が1匹いたとしよう。そのとき耳が4つ存在するとは通常言わないだろう。確かに兎も犬も人間の何倍もの機能をもつ耳に違いないが明らかに兎の耳と犬の耳は異なる。兎が2匹いるならば耳は明らかに4つと言える^{xv}。

しかしながら、兎の耳の性能や機能が完全に把握された訳ではない。つまり数は概念を先取りして性能や機能の一致を前提にする。もしくは、それらを前提にして、つまり約束しての話である。その約束は実に神秘的である。なぜならまだ分からないことを分かったごとく約束してしまうからである。この先取りという約束は体系や全体論 (演繹論) を導く。ここに数の神秘性がある。

体系や演繹は何らかの形で統合を導く。それは約束にしる、一方の関係が他方の関係と等号に現れる。クロスビー (Crosby A.W.) は述べている。代数を意味する語源、アラビア語 algebra^{xvi}は al (定冠詞) + gebra (こわれた部分をつなげること) であり、「代数も複式簿記と同様に、その水車にもちこまれる製粉用穀物を二つのカテゴリーに分類する。」^{xvii} と。原料の穀物と製品の粉であるが故に等号を意識させる。一つのものでありながら、二つのものである^{xviii}。穀物=製品 (粉) は価値において成り立つ。換言すれば、それは抽象化である。つまり、数が持つ極限の抽象性は時と場を異にする現象を結びつける役割を果たしてきたのである。それは発見であり、発明を編み出す。

地球上で検証された視覚 (スペクトル分析) によって、分子や原子の構造が把握されてきた。そのデータを基に他の惑星の構造を分子や原子の段階で把握することができる。これは数学のおかげである。他の惑星に人間が行かなくとも他の惑星の構造を知ることができた。つまり、言葉を換えれば数学の世界は定量的でありながら、定性的な発見を為し得ることになる。認識を可能にしたのは経験と数学である。カントは数学を認識論と見なした。その意味で、経験と数学は切り離せない。

こうした数学の特徴をマッハ (Mach, E. 1838-1916) は「思惟の経済」と言った^{xix}。マッハは言う。

「思惟の経済が一番完成されているのは、形式化が最も進んでおり、自然科学がしばしば補助手段として用いる学問、つまり数学です。異様に響くかもしれませんが、数学の強みは不必要な思考を一切敬遠するという点にあります。思惟の操作を最大限に節約するという点にあります。数と呼ばれている順序記号からして、すでに驚くべき単純化と節約の体系です。」^{xx}

つまり、科学的な事実は少ない概念を用いて完成することができる。それは数学という抽象化のおかげである。もとより、「思惟の経済」は誤解されてはならない。この経済は経済学を指してはいない。あくまでも思惟表現の経済すなわち節約である。思惟には目的や目標がある。スミスが経済を「見えざる手」として調和や秩序として一括したように、思惟説明の簡潔さである。それに対して、経済学における調和や秩序は数量(価値)化された分業や分配を意味している。マッハはあくまでも思惟に要請される包括的目的説明の簡素化である。中世スコラ哲学者のオッカム(「オッカムの剃刀」)にも同様なことが言える(これについては後に述べる)。

グロスビーも述べている。

「抽象化され、一般化されるにつれて、代数はより明晰になった。代数学者は記号が意味する内容はさしあたり無視して、記号の操作に注意を集中できたので、前例のない知的な離れ業を成し遂げられるようになった。……アルフレッド・フーパーはこう述べている。『代数の記号体系によって、ある種の“パターン”ないし数学的“工具”が与えられる。これは、あたかもジグ(jig)が工作物を固定して切断用工具を正確に導くように、人間精神を正確かつすみやかに目標まで導くのだ。』ガリレオ、フェルマー、パスカル、ニュートン、それにライブニッツはヴェイト(Viete, F.)^{xxi}から精密な代数用ジグを受け継いだ。彼らはこれを用いて、17世紀が天才の世紀と称される所以となった赫々たる業績をあげたのである。」(かっこ内と一部修正と加筆、筆者)^{xxii}

つまり、数学は抽象化を含意し、容易に体系やパターンを導き出さずにはおかない。それが天体や宇宙を解き明かしてきたのである。この体系化やパターン化は秩序や調和であり、即プラトンのアイデアに通じる。

グロスビーは続ける。「数学の栄光は、ものごとを明確にするという特性……ものごとを普遍化するという特性によって、最大の謎——たとえば、宇宙の形而上的および形而下的本質——の解明に立ち向かうよう、人間を誘うところにある。」(かっこ内筆者)^{xxiii}

数学は天体の運動をも解明してきたのである。その中でニュートンの万有引力の法則(万有引力は距離の二乗に比例して弱くなる。)による宇宙概念の解明は述べるまでもないことである。その後、アインシュタインが相対性理論を提示して修正を加えても、ロケットはニュートンの法則によってたびたび地球を脱出している^{xxiv}。ニュートンの功績は今も有効に働いている。

いわば、ニュートンが形而下的立場で理論物理学を展開させたが、アインシュタインはそれを超えて形而上学的な立場に踏み込んで理論物理学を展開させた。これを竹内 薫は次のように説明する。ニュートンの思想は絶対時間と絶対空間の思想であり、「世界というシステムを中心は不動である」と結論づけたが、それはアインシュタインによって書き換えられた、時間も空間も絶対ではない、と。したがって、前者は「モノ的」、後者は「コト的」とであると。要するに、数学は哲学に並んで認識手段を意味する^{xxv}。しかし、筆者にしてみれば、竹内の主張はあらためて認識論に及んだ言明に見えるが、カントの「物自体」を考えれば近世にこの思想課題は既に解決済みである。認識も道徳もそして判断も全てその鍵はわれわれ人間の側にある。まさに「コペルニクス的転回」である。それは閉じられた演繹論の打開策を意味している。幾何学や数学は閉じられた体系や演繹に入りかねない。とりわけ、社会科学にその意識が強く要請される。新たな次元に置

き換える必要がある。その閉じられた集合の打開策はアイデアの世界を呼び込むことにしくはない。

しかしながら、アナロギアとしての演繹論を生み出したのは幾何学や数学のおかげである。ルカ・パチョーリも数学者にして簿記論を展開させることができた理由はこのような幾何学、数学の理解にあったと思われる。これは後に詳述する *Summa* の理解に通じる。

要するに、数学の世界は定量的でありながら、定性的な発見を為し得る。これは複式簿記論に含意されている。資産を負債と純資産に分けて表示するように、一つの勘定科目（価値）を他の勘定科目（価値）に置き換えるからである。企業間比較のために、業種別に勘定科目を標準化することが望まれる。それはアイデアに照らしてのことである。

5. 古代哲学者のアナロギアに含意された等比概念

アナロギア (αναλογία = 比例、類似、関係、ラテン語でプロポルチオ *proportio* = 調和、比例、類推) とは何か。アナロギアはアイデアと共に「洞窟の喩え」として有名である。プラトンはまず見えているものは真実の姿ではない、という考えを持っていた。人間はある種の奴隷であって、見ているものすべては偽りで真の実在は他にある、というのである。では、見えているものは何か。それはみな真実の姿の陰にすぎない、と。プラトンは真の世界、すなわちアイデアの世界は別にある、と考えたのである。彼はその真の世界（善のアイデア）とわれわれの現象の世界をアナロギア（類比、類推）として次のように説明した^{xxvi}。その説明に幾何学や数学がもつ演繹が援用されている。

プラトンは太陽を演繹的に（幾何学が示してきたように）比例に据える。太陽に依存せずして全ての生き物は存在しない。その機能は体系的かつ組織的に創られている。眼の機能を考えよう。その視覚は太陽の“光”が原因である^{xxvii}。つまり太陽は全ての根本原因である。したがって、われわれの真の世界（善のアイデア）と現象の世界との関係に推論、すなわちモデル関係が成立する。これがアナロギアである。

太陽において、見える場（可視界）で、〈見える機能（視覚）〉と〈見られるもの〉
善において、知られる場（可知界）で、〈知るもの〉と〈知られるもの〉

太陽 : 現存するすべての生き物 = 善のアイデア^{xxviii} : 他の諸々の認識対象

太陽が全ての原因であるように、善のアイデアが演繹の包括的根拠（原因）である。つまり、それらは類比され類推が可能である。善のアイデアから現象界（陰の姿）に当為の姿が演繹される。生き物（自己）は「見える機能」と「知るもの」である故に、善（最高の道徳）を掲げ認識、判断においても包括的に全体論（モデル）からの思考、推論が提示されている。この思考は演繹的推論である。善を前提にして関係事象全てを包括的に推論する。そして、それに抵触する不合理を排除するという方法論である。そもそも脳の機能、パターン認識も無意識^{xxix}もそれに類する^{xxx}。

このアナロギア、つまり善を觀照するに留めず現実の世界に反映する思考方法は等号で結びつけられた比から生まれたのである。これは西洋哲学が展開する存在論や認識論そして科学方法論、経験論や合理主義等々全てに渡って継承されている。しかもその核を占めるのが数学的比の表現に起源を持っていたことをわれわれアジアの民は心にとめねばなるまい。

このプラトンのアナロギアを継承的しつつ批判したのがアリストテレスである。プラトンのアイデア (idea) にはエイドス (eidos 見られるもの) が混在していた、と^{xxxi}。アリストテレスは奥に潜む、善のアイデアとその具体的な形とを区別して採り上げたのである。アイデアとエイドス (日

本語でそれを形相と訳した)とを区別したのである。たとえば、鉄でできている物が多い、その形は車輪であったり、レールであったりする。その形がエイドスであり、鉄がヒュレー (hylē、素材) である。

したがって、アリストテレスはプラトンのアナロギアを批判的摂取とする。

「善の定義は…すべてにおいて同一のものとして現れることが必要であろう。あたかも雪においても鉛白においても白の定義がやはりそうであるように、しかるに善たるかぎりの名誉・知慮・快樂に与えられる定義は、それぞれ区別と差異を有しているのである。してみれば、善はここでもやはり単一なアイデアに即した共通的な或るものではないことになる。…アイデアについても…同様である。…たとえあらゆる善について共通的に述語されるような、ないしは独立的にそれ自身としてあるごとき何らかの単一な善が存在するとしても、それは人間が行うべき善、獲得すべき善というものを意味するものでないことはあきらかであろう。しかるにいま求められているのはまさしくこうした意味での善なのである——。」^{xxxii}

したがって、アリストテレスは『形而上学』でアナロギアを次のような説明で捉える。

「『存在』というのにも多くの意味がある。〔訳しかえれば、物事はいろいろの意味で『ある』と言われる〕。しかしそれらは、或る一つのもの、或る一つの自然〔実在〕との関係において『ある』とか『存在する』とか言われるのであって、同語異義的ではなく、あたかも『健康的』と言われる多くの物事がすべて一つの『健康』との関係においてそう言われるようにである、詳言すれば、その或るものは健康をたもつがゆえに、或るものは健康を受け入れるものであるとのゆえに、ひとしく『健康的』と言われる。」^{xxxiii}

われわれの健康に置き換えれば理解が得られる。人間ドックに行けば諸々のデータが与えられる。それらをもって健康との診断が下る。つまり、血液のデータや尿のデータ等々それぞれ異質のデータから健康との診断である。すなわち、健康は同名同義ではなく、また同名異義でもない第三の思考で見つめる^{xxxiv}。健康は第三の思考価値で貫かれている。したがって、健康という判断は医学の進歩を踏まえて無限に続く。これを「無規定的判断」^{xxxv}という。健康は医学の進歩と共に変化する。その意味で健康を確実に定義することはできない。健康は人間にとって価値である。医学が進歩するに従い、その価値は解明される。しかし、その進歩は永遠に続く。アナロギアはまさに「無規定的判断」である。健康を意味するデータは質的にも量的にも無限である。

価値は同名同義におかれることなく、また同名異義におかれることもない、第三の思考に置かれる。第三の思考は市場と置き換えられる。市場は交換（価値）を司る。経済は交換におかれて、つまり等価におかれてはじめて価値が実現する。その価値とは経済という秩序や調和を維持する契機である。また交換の合理性つまり等価概念から貨幣が生まれ出た^{xxxvi}。プラトンからアリストテレスへ、アナロギア（類比、類推）の式から経済学や簿記論の原理さらには貨幣を論じることができる。それどころではない、アリストテレスは言う。「比例的ということは単に抽象的な数に固有ではなく、総じて数的なるもの全般に属している。」^{xxxvii}、と。

そのアナロギアと数学すなわち比例から簿記の発生が考えられる。その比例はアリストテレスが言うところの「幾何学的比例（アナロギア・ゲオメトリー）」^{xxxviii}である。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』で次のように述べている。

「『正』ということも、…少なくとも四項目から成り、その比が同一なのである。すなわち、人間と人間の間、配分されるべき事物と事物の間の区分の仕方が同様なのである。…AがBに対するはCがDに対するごとくであるだろうし、だからまた、これを置換すれば、AのCに対するはBのDに対するごとくであるだろう。したがって全体の全体に対するもまた同様である。全体とは配分を受けてそれと結合された全体を意味する。…それが正しい結合の仕方なのである。かくしてAをCに、BをDに組み合わせるということが配分における『正』なのであり、この場合の『正』は比例背反的なものに対する『中』にはかならない。…比例的ということが『中』なのであり、『正』は比例的ということなのだからである。」^{xxxix}

「…いまひとつ種類は、もろもろの随意的ならびに非随意的な人間交渉において、正しきを回復するための矯正的なそれである。この『正』はさきのそれと異なった形態を有している。というのは、共同的なもろもろの事物の配分にかかわるところの配分的な『正』は常に上述のような比例に即している。」^{xi}

意味するところは、AとBは人間でCとDが配分された事物である。そのA氏にCをB氏にDを所属させる、つまり $A : B = C : D$ に新たな比を加える。それは $A : B = C : D = A + C : B + D$ である。つまりAにCが帰属し、BにDが帰属すると捉えることができる、と言う。つまり、「正しい」は「中」すなわち「均衡」^{xii}となる、と。それは「全体の全体に対する」ことである。つまり、常に全体を意識する。この演繹的思考は図形という全体を含意した幾何学の思想から来ている。これは西洋に発生した複式簿記の根拠となろう。比は等価思想の下で人間に事物の帰属意識を表すものであった。常に全体論の下で施行されていることが複式簿記発生の根拠と考えられるからである。さらに、共同的事業に対する配分も上記の比に従う配分であり、その例外とはならないことが記されている。

ソールはそれを複式簿記発生論に見ている。

「中世イタリアの商人は…複式簿記を発明したのである。これは、利益と損失の明確な把握につながる革命的な第一歩だった。イタリアの商人は、仲間で資金を出し合って貿易を行う共同出資方式を採用しており、そのために各人の持ち分や利益を計算する必要があった。そこで必要は『発明の母』という言葉通りの結果を出したわけである。…現金勘定と出資者勘定が分離され、利益をリアルタイムで把握できるようになっていた。…複式簿記をいつ誰が発明したかがわかるような資料はいっさい存在しない。一人の人が発明したわけではないようだ。ただ、1300年頃のイタリアでなぜ複式簿記が誕生したかについては、次のような説明が定説になっている。まず、アラビア数字が使われていた。さらに、貿易が発展し、多くの資本が必要になって、共同出資方式が考案された。そこで帳簿は、単に所有しているものの記録ではなく、投資家に還元すべき利益余剰金の累計を計算するために活用されたのである。複式簿記なら、投資家の取り分を長期にわたって分割して払い出す場合でも、正確に計算できる。出資者の払い出しは債務の返済と同様の扱いになり、数年にわたる分割払いでも、ある時点の未済残高を示すことができる。」^{xiii}

複式簿記が比の概念、遠くアナログア思想から編み出されたことは明白である。実は経済取引ということは個々人の異質な仕事を経済という全体に総合し纏めたのはこの比の概念がもつ「中」や「正」の結果である。その「中」や「正」に発生したのが貨幣である。その意味でつまりアリストテレスにとって、貨幣も複式簿記もアナログア（比）を根拠にし、共に正しさや体系に役立つ手段としたと言えよう^{xiiii}。

6. ルカ・パチョーリが複式簿記に込めた精神

ソールは『帳簿の世界史』で次のように述べている。

「パチョーリはトスカーナ生まれで、幾何学と代数学に精通し、かつ新プラトン主義に親しんでいた。この点では老コジモと同じ世界に生きたと言えよう。…コジモは会計のエキスパートであると同時に人文主義に傾倒した。そして事業の発展と古典学習の奨励と芸術の後援によって、フィレンツェの商業、学問、芸術、建築をみごとに開花させた。修道士にして数学者のパチョーリは、こうした好ましい成果をもたらしたのは神の言葉である数学だと考えた。複式簿記は現世のことではあるが、神の言葉である数学の派生物であり、日々の金銭的取引を統べる哲学にほかならない、と。」^{xlv}

*コジモ・デ・メディチ (Cosimo, de' M.1389-1421) はフィレンツェ屈指の名家に生まれ、銀行家にして会計のエキスパート、イタリアの資本主義を人文主義（プラトンやアリストテレスの哲学）と結びつけた^{xlv}。ルカ・パチョーリの簿記論は周知のように、『算術・幾何・比例及び比例全書』の中に一部として収められている。言い方を換えれば数学書の中に一部である。既述のように、幾何学は

公理論であり、哲学的には演繹論である。「複式簿記は…神の言葉である数学の派生物…」はアナロギア（比）を意味している。『算術・幾何・比例及び比例全書』は、簿記論は現世のものであるが、神の世界に入れようとしての表現である。まさに新プラトン主義の中で簿記論を展開していた^{xlvi}。換言すれば、パチョーリの複式簿記論はアナロギアに完全に包まれていた、と言えよう。

複式簿記が述べられているのは、*Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita*. 1494（『算術・幾何・比例及び比例全書』略して『スママ』、神学や哲学では「スンマ」と呼ばれる）であつて、いわゆる数学書の中にすっぽり入った複式簿記論である。複式簿記論が数学との関わりで意義がある。既述のように、古代哲学は数学と密接に関係していた。中世もそれが支配していた。

まず、この冒頭の *Summa* であるが、このタームは中世を支配する言葉であつた。トマス・アクィナス（1225?-1274?）の『神学大全』は *Summa theologiae* の訳である。トマス・アクィナスの『神学大全』（*Summa theologiae* 「スママ・テオロギアエ」）の *Summa* の意味を確認しよう。*Summa* は「コンペンディウム（compendium）＝節約」と言い換えられる^{xlvi}。さらに、この「節約」とはどういう意味であろうか。パチョーリ（1450?-1520?）と一世紀前のスコラ哲学者（フランシスコ会修道士）、オッカム（William of Ockham 1285?-1347?）を見るにしくはない。オッカムは「オッカムの剃刀」で有名である。「オッカムの剃刀」は「節約の原則」として「確かに必要であるという場合以外は、説明や原因の数を増してはならない」という意味である。しかし、単純に不必要なものを省けというのではない。この点を哲学者・清水哲郎は「オッカムの剃刀」を「神は多くの場合、より少ないものを介して為し得ることを、より多くのものを介して為す」^{xlvi}と捉えている。既述のように、オーストリア学派経済学の膝元にいたマッハも同様な「思惟の経済」を主張して『感覚の分析』^{xlvi}の核に据えた。「節約」は単純に簡潔に論説する意味ではなく、包括的概念の下に要素を整える、という意味である[!]。包括的概念とは秩序や調和であり、道徳である。既述のプラトンやアリストテレスのアナロギアが働いていることになる。

こうしてみると、当時の「スママ」はある主題について課題を出してその否定と肯定の論証を施すことである。すなわち、弁証論的に説明して最終的に結論を得る、という形式を採っていた。近代哲学を彩る哲学者、ヒュームもカントもこの方法論を採っている。哲学者のみならず、経済学のアダム・スミス、メンガーそしてハイエクもその弁証論の中で理論展開を行っている。この弁証論的説明は演繹論を意味している。つまり、西洋思想の基底にアナロギアが存在する。

パチョーリが生きた時代は中世である。その中世を支配していた思想は新プラトン主義である。だが、一筋縄ではいかない。ソールによれば、まさに逆説的に新プラトン主義というキリスト教の信仰の深さが複式簿記の一般化を後退させた、と。「新プラトン主義の貴族的哲学は、商人の価値観と衝突し始めた。」^{li}のである。

プラトン主義と新プラトン主義の相違は何か。新プラトン主義はプラトン思想の継承者・アリストテレスの思想を採り入れて宗教（キリスト教）的側面において完成させた。新プラトン主義は太陽や善のアイデアを神に置き換えて神秘主義を加えたのである。その新プラトン主義の代表者は古代ギリシャ哲学とキリスト教との融合をはかった最大の功労者はアウグスティヌス

（Augustinus, 354-430）であるが、彼はアリストテレスの『ニコマコス倫理学』を破棄しても良いとまで言った、とされている。これに対して、アリストテレス哲学の信奉者でこの時代を象徴する、フィチーノ（Ficino, M. 1433-1499）^{lii}の功績も見逃せない。フィチーノはアリストテレスの『ニコマコス倫理学』を大いに引用した^{lii}。これら二者の攻め際にパチョーリは生きていた。

しかしながら、逆説的にキリスト教の信仰の厳密さや厳しさが故に商取引を扱う現実の世界は神学から見て蚊帳の外という環境が支配した。新プラトン主義はアリストとキリスト教の影響を

受けて経済取引を低く見ていたからである。つまり、取引を扱う今で言う商魂と理解され神聖から外された。しかし、興味あることに数学は自然を理解するための神聖な学問であるとされたのである^{iv}。勘定科目に神の言葉を併置させた、パチョーリの信仰配慮もさることながら、数学が此岸と彼岸との間を取り持ったのである。数学がもつ純粋性がこの攻め際を解決したのである。いわば、数学者として衣を着ていたパチョーリに対する市井の見方と数学が発するオーラを感じざるを得ない。

最後に卑近な例を挙げておこう。誰もが旅行で西洋に行って買い物をして感じてきたことは、彼らが釣り銭を出すのに引き算ではなく足し算をしていることである。もとより、アジアのわれわれは引き算である。それはおそらく詳述してきたように、数学が持っていた思想概念にある。数学は幾何学に代表されるように、演繹であり、道徳を含意するバランスの思想であった。取引なら、均等が要請される。それはアリストテレスのアナロギア思想、「正」は「中」である。その均等を行為で示すには足し算で釣り銭を出すことである。それは西洋が培ってきたバランスの思想の現れである。

7. むすび

再度『スママ』を見よう。*Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita*. を私なりに訳すと、『算術・幾何・比例及び調和についての全体論』となる。さらに、そのパチョーリが活躍していた中世の潜在的意味をほぐしてみると、以下ようになる。*Arithmetica* (算術) は「こわれた部分を繋ぐ」の意をもつ。*Geometria* (幾何) は「公理」の下での認識を意味する。

Proportioni (比例) は「中」であり「正義」で道徳にして判断を意味する。そして *Proportionalita* は (アナロギア、調和) を意味する。「*Summa* (スママ)」は既述のように、「包括的概念の下に要素を整える」こと、すなわち「主題について課題を出してその否定と肯定の論証を施すこと」。こうしてみると、パチョーリの簿記論はアナロギア (演繹) を含意する数学で包まれ、つまり演繹論に包まれて展開されていると言える。まさに数学という名のアナロギアは認識論、存在論そして道徳の枢軸になっていたのである。パチョーリが新プラトン主義の下にあったがゆえに、数学者であり、簿記論を展開したことの意味が解かれる。

新プラトン主義は3世紀から6世紀に栄えた思想である。その思想はギリシャ哲学が宗教的側面において完成をみて、キリスト教もギリシャ哲学との融合を得て完成した、ということになる。この融合から得た思想は西洋の歴史2000年のあらゆる科学と文化の礎になってきた。その一里塚がルネサンス (14世紀から16世紀) である。舞台はイタリア (フィレンツェ) である。経済で見れば、自由都市を象徴する商業と工業の勃興し、貨幣が満遍なく行き渡った時代である。片や、都市社会の信条は古代ギリシャ・ローマが培った宗教である。経済と宗教には壁がある。それを乗り越えねばならない。宗教と経済の間を取り持ったのは人文主義であり、それを担ったのが躍動的な個人である。それがルネサンス (文芸復興) なのである。パチョーリはこの時代に生きたのである。

中世を彩る人文主義の中心は数学であった。数学の下で宗教や宇宙を解こうとした。それは遠く古代のギリシャ人にしてイタリアに住み影響を与えた、ピュタゴラスが気づいていたことである。ピュタゴラスが気づいていた数学 (比例) を援用して、プラトンやアリストテレスは宇宙や自然を解読してきたのである。

数学はわれわれ日本人にとってどこか自然科学の道具でしかない。それは現実を見つめるにつけ役割を果たしてきたからである。しかし、それはまことに狭隘な理解の下にある。既述のよ

うに、数学の領域が多岐に渡ることを見てきた。幾何学は認識論の基になっていた。比例はアナロギアを意味したが故に、対象に美や調和や秩序を発見することとなった。換言すれば、それは認識論、存在論さらには倫理学を共有することとなる。それは代数学が見える対象を無限に抽象化して等号の境地に迫りやることのできる神秘的な学問と理解されていたが故のことである。アナロギアと数学は切り離せない。

したがって、幾何学と数学はアナロギアを後援し、バランス (balance) の思想を編み出した、ということができる。Balance はラテン語の bilanx から来ている。bi (twice の意) + lanx (scale の意)、すなわち「二つの目盛りをもった」という意味である。転じて「統制」や「支配」の意を持っていた。それは此岸であるこの世界を彼岸に至らしめる方法であった。「統制」や「支配」の意は全能の神が司るが、現実を神の世界に即移せる手段は数学にある。それは数学が純粋性をもつからである。ルカ・パチョーリが数学者として複式簿記を解く理由はそこにあったと思われる。

-
- i 当時、英訳 (*The Theory of Money and Credit* translated by H.E. Batson 1934) があった。しかしこの英訳は誤訳だらけで話にならなかった。原文の独語そして英訳さらには日本語訳を丁寧に対照させて読了とした。一谷先生にその説明をして褒められたのである。
- ii この全体論はターリズムやドイツ歴史学派が掲げてきた国家中心主義の全体論 (保護主義) でもない。哲学者・カント哲学全体を覆う方法論 (超越論的演繹) である。
- iii Smith, A., *Essays on Philosophical Subjects*, Edited by W.P.D. Wightman and J.C. Bryce, Liberty Fund, p.47. (水田洋ほか訳『アダム・スミス哲学論文集』、名古屋大学出版会、1993年、28頁)
- iv 西洋哲学で言うところの、カントの「超越論的弁証論」や「第三の思考」やポパーの「反証主義」そしてプラグマティズムのパーズが言う「アブダクション」、さらには社会学者・ウェーバーの「価値自由」にも言える。これら全てがアナロギアに源をもつものである。アリストテレスはプラトンのアナロギアを拡張して社会を意識させたが故に、西欧に多彩な (基本は同じだが) 方法論を提供してきたと言える。簡単に言えば、「…からの自由」(もともとこれは私の言い方であるが) である。
- v Smith, A., *Ibid.*, pp.104~105. (同書、103頁)
- vi もとより、その起源は数学者にして宗教家、哲学者のピュタゴラス (Pythagoras, BC582-497?) にあった。
- vii マーシャルは需要と供給の一次的均衡に於いて主体的均衡 (対市場均衡) を説明している。少年の苺摘みの快樂 (食べる効用を含む) と苦痛 (労苦) が均衡する点が存在すると。この均衡点から市場均衡までや調和や秩序を導き出すことは難しい。Marshall, A. *Principles of Economics*, 1890, p.331. (馬場啓之助訳『経済学原理Ⅲ』、東洋経済、1975年、13頁)
- viii Shumpeter, J. A. *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationaloekonomie*, 1908, Zweite Auflage, Duncker & Humblot Berlin, 1970, S.438. (大野忠男・木村健康・安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容(下)』岩波文庫、1983年、219頁)
- ix その付けが深刻な国家をもたらしている。日本は 1000 兆円もの赤字を抱えている。先進国の中で突出した赤字である。それは日本が宿命的に持つ官僚国家や縦社会の構造が引き起こした結果である。霞ヶ関で決まる意思がマクロ的視野に基づいたものであり、その結果が顕現したと言える。ドイツは二度の大戦において天文学的数字のインフレを引き起こした。その現状が現在にはびこっている格差社会であり、貧困社会である。極一部の富裕層が富の大部分を支配し経済全体を脅かしている。デフレから舞い戻ることのできない経済を作り出してしまったのである。なぜなら、富が集中すればするほど金融が支配するマネーゲームの世界が誕生して実物経済を蝕んで行くからである。マクロ経済に縛られた国家財政は赤字に赤字を重ね、経済全体を有効な需要を支配する好循環を実現するカンフルを持つことは完全にできなくなってしまったからである。しかも、国はグローバル化の下で企業を呼び込むために、法人税は軽減を余儀なくされ再分配の要にあたる施策を施すことができなくなっている。ますます個人の視点が薄弱になり回り回って経済の好循環を閉鎖している。
- x 筆者としては、古典派経済学のみならず新古典派経済学を入れたい。
- xi パチョーリは『スママ』の「序論で占星術、算術、彫刻、宇宙論、商業、用兵術、論理学、遠近法、さらには神学さえもが数学的な原理に基づいていることを断言している。」Crosby A.W., *The Measure of Reality Quantification and Western Society, 1250-1600* Cambridge University Press, 1997, pp.214~215. (小沢千重子訳『数量化革命』272頁)

- xii 幾何学はエジプトのナイル川の氾濫に備える測量に由来するという。それがギリシャに伝えられたと。『哲学・思想事典』波ある』と述べていたからだ。ダ・ヴィンチは『神聖な比例』の挿絵として、幾何学的図形を数葉書いている。」Crosby A.W., *Ibid*, p.213. (同書、271 頁)
- xiv カントは直観と概念(普遍的表象)の間に「図式(Schema)」が入って普遍的認識が進められるとする。この「図式」というタームもギリシャ古代哲学からの継承であって幾何学における演繹と無関係ではない。Kant, I., *Kritik der Reinen Vernunft*, B S.179f. (篠田英雄訳『純粹理性批判(上)』、岩波文庫、214-216 頁)
- xv ヒュームは次のように述べている。「われわれが、推論の連鎖をどれほど複雑に続けても、完全な厳密さと確実さを保持することができる学問としては、代数学と算術だけが残る。われわれは、数の等しさと比を測定するための精確な基準をもち、数がこの基準に一致するかどうかによって、誤る可能性なしに数の間の関係を決定するのである。われわれは、二つの数が、一方の数が他方の数に含まれるすべての単位(数の一)に対応する単位(数の一)を含むように構成されているとき、それらの数をたがいに等しいと言う。そして、幾何学を完全に誤ることのない学問と見なすことがほとんどできないのは、延長においては、等しさのこのような[精確な]基準がないからである。」これは記号論理学分野で「ヒューム」の原理として知られたところである。Hume, D. *A Treatise of Human Nature*, by L.A.Selby-Bigge, p.71. (木曾好能訳『人間本性論 第一巻 知性について』法政大学出版局、91 頁)
- xvi Algebra はアラビア語からラテン語になった。下宮忠雄・金子貞雄・家村睦夫編『スタンダード英語語源辞典』、大修館、15 頁
- xvii Crosby A.W., *Ibid*, p.206. (同書、162 頁)
- xviii スミスが商品の概念の使用価値と交換価値の統合と捉えたことに通じる。全社が買い手、後者が売り手が認識する概念である。マルクスは対立ながら統一、弁証法的統一とした。
- xix Mach, E., *Das Analyse der Empfindung und das Verhaeltnis des Physischen zum Psychischen* 1918, S.41. (須藤吾之助/廣松渉訳『感覚の分析』、法政大学出版局、1971 年、44 頁)
- xx Mach, E., *Die ökonomische Natur der physikalischen Forschung*. (廣松 渉/加藤尚武編訳『認識の分析』、法政大学出版局、1971 年、37 頁)
- xxi フランスの数学者、法律家ははじめは弁護士、文字記号を使用して方程式の解の基本的諸演算方式を確立し、また三角法の形態を整えた。岩波西洋人名辞典(増補版)、165 頁参照。
- xxii Crosby A.W., *Ibid*, p.120. (同書、160 頁)
- xxiii Crosby A.W., *Ibid*, p.122. (同書、163 頁)
- xxiv 竹内 薫『世界が変わる現代物理学』、ちくま新書、2004 年 25 頁
- xxv Kant, I., *Kritik der Reinen Vernunft*, S.749. (篠田英雄訳『純粹理性批判(下)』、岩波文庫、23 頁)
- xxvi プラトン『国家』第 6 巻、508d、(田中美知太郎・藤沢令夫・森 進一・山野耕治訳『プラトン II』、中央公論社、1987 年、236-237 頁)
- xxvii プラトン、『国家』508b-508c、(同書、235 頁)、プラトン述べている。「眼のもつ機能は、太陽から賄われているのであって、それは太陽から注ぎ込まれたものというような格好で所有されているのだ。…そもそも太陽も、それが、すなわち視覚であるということはないけれども、視覚の原因となっていて、視覚そのものによって見られるということがある…。それならば、この太陽が、〈善の生みだしたものと〉…宣言してくれたまえ。(善)は、これを自己と同じ比をもつものとして生みだしたのだ。つまり、〈善)が、知られる場(可視界)のうちにあつて、〈知るもの)と〈知られるもの)とに対してもっている関係は、見える場(可視界)において太陽が、〈見えるはたらき(視覚)〉と〈見られるもの)とに対してもっている関係なのだ。」認識する人間の前に視覚に必要な光が存在する。その光こそ太陽のものである。認識の全てが太陽に依存する。ならば太陽は地球上の生き物の全ての根源である。太陽は生き物全ての包括的存在である。
- xxviii プラトン哲学の重要な用語の一つ。そもそも「イデア」も「エイダス」も「見えるもの」を指していた。プラトンの「イデア」は「エイダス」とほぼ同義。したがって、プラトンには数多くの「イデア」が存在する。美に於いて「美のイデア」、人間には「人間のイデア」が存在する。アリストテレスはこれらを切り離し、「エイダス」とは見られたものの形とした。「イデア」が理念や理想を意味していたから、プラトンは見える形から真を見ようとしていた。それに対して、アリストテレスは「エイダス」を「形相」として「イデア」と切り離した。
- xxix 金井良太『脳に刻まれたモラルの起源 人はなぜ善を求めるのか』、岩波書店、2013 年、2 頁「無意識の世界が、意識できる世界の外に広がっていることに気づきようがない。脳を研究することは、けっきょく人間の無意識と向かい合うことになる。ハイエクも述べている。「われわれの理論の枠組みのなかで、精神的ではあるが意識されない事象は、気がついたときにはじめて明確な意味をもつという考え方…、これは、いかなる無意識の理論が恒久的な知識の増加となろうとも、それにたいする体系的な位置づけを与える。」Hayek, F.A., *The Sensory Order, An Inquiry into the Foundation of Theoretical Psychology*, London, Routledge & Kegan Paul Limited, 1952, p.152. (穂山貞登訳『感覚秩序』春秋社、1989 年、173 頁)

- xxx Hayek, F.A., *Ibid.*, pp.93~96. (同書、110~113 頁)
- xxxii *ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK*, 987b1~987b7. (出 隆訳『形而上学(上)』、岩波文庫、112~113 頁) これについては同書の「訳者注」(331-332 頁)が参考になった。
- xxxiii *ARISTOTELOYS HΘIKQN NIKOMAXEIQN* (Etica Nicomachea Bywater, I Oxford, 1894) 1096b20~1096b30 (高田三郎訳『アリストテレス ニコマコス倫理学(上)』、岩波文庫、27-28 頁)
- xxxiiii *ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK*, p.1003b1, p.1048b1. (『形而上学(上)』、112~113 頁、『形而上学(下)』、1960 年、33 頁)
- xxxv この第三の思考でカント哲学を見直したのが、石川文康である。石川文康『カント第三の思考』、名古屋大学出版会、1996 年
- xxxvi 石川は述べている。「無限判断に関するもとの考察は、少なくともはるかアリストテレスにまでさかのぼりうるが、結論から言えば、18 世紀のほとんど全ての代表的講壇哲学者が無限判断を論じていた。」石川文康、同書、37 頁
- xxxvii *ARISTOTELOYS HΘIKQN NIKOMAXEIQN*, 1133a, 19-21 (同書、187 頁)
- xxxviii *ARISTOTELOYS HΘIKQN NIKOMAXEIQN*, 1131a30 (同書、180 頁)
- xxxix *ARISTOTELOYS HΘIKQN NIKOMAXEIQN*, 1131b10 (同書、180 頁)
- xl *ARISTOTELOYS HΘIKQN NIKOMAXEIQN*, 1131b, 1-10 (同書、180 頁)
- xli *ARISTOTELOYS HΘIKQN NIKOMAXEIQN*, 1131b, 29-30 (同書、181 頁)
- xlii *ARISTOTELOYS HΘIKQN NIKOMAXEIQN*, 1131a, 10-17 (同書、178 頁)
- xliii Soll, J., *The Reckoning Financial Accountability and the Rise and Fall of Nations*, 2014, p.11. (村井章子訳『簿記の世界史』、文藝春秋、2015 年、34-35 頁)
- xliiii *ARISTOTELOYS HΘIKQN NIKOMAXEIQN*, 1133b, 10-19 (同書、189 頁)
- xliv Soll, J., *Ibid.*, p.49. (同書、96 頁)
- xlv Soll, J., *Ibid.*, pp.30~47. (同書、64~92 頁)
- xlvi Crosby A.W., *Ibid.*, p.211. (同書、269 頁)
- xlvii Summa は「知的素材が簡潔であって、きわめて独創的、組織的総括を意味する。」したがって、「節約」はこの簡潔と総括を意味している。「12 世紀スコラ哲学者・ロバート(Robert of Melum)はスンマを規定して〈全く単一にして簡潔な総括〉と述べている。…このように〈スンマ〉は種々の科学の総括的叙述を表示しており、スコラ学者は競って〈スンマ〉を書くよう努力した。」キリスト教大辞典、教文館、昭和 43 年改訂版、604 頁
- xlviii 清水哲郎『元祖オッカムの剃刀』、季刊『哲学』1990 年、13 頁、清水は述べている。「全てのことは第一原因である神の直接の働きの結果だとするのが、もっとも単純な構造であって、ここからすれば、通常の節約の原則が認めるような単純性は『り多くのものを立てる』説明ということにもなるでしょう。」
- xlix Mach, E., *Die oekonomische Natur der physikalischen Forschung*. (廣松 涉/加藤尚武編訳『認識の分析』、法政大学出版局、1971 年、37 頁) また、マッハは『感覚の分析』でも述べている。「思惟の経済、事実の経済的叙述、これが科学の本質的な課題であるということについて、…この見方は…決してまったく新しい思想だというわけではない。アダム・スミスに遡ることができるし、…発端を尋ねればニュートンにまで遡ることができる。」Mach, E., *Das Analyse der Empfindung und das Verhaeltnis des Physischen zum Psychischen*, 1918, S.41. (『感覚の分析』、法政大学出版局、1971 年、44 頁)
- ¹ 筆者はハイエクの「自生的秩序」を「…から自由」と位置付けた。「…」には人間が侵す瑕疵や誤謬が入る。
- li Soll, J., *Ibid.*, p.40. (同書、78 頁)
- lii 『キリスト教人名辞典』、日本基督教団出版局、1986 年、1221 頁を参照。フィッチャーはギリシャ語関連文献をラテン語に翻訳した功労者で有名。
- liii Soll, J., *Ibid.*, p.39. (同書、77 頁)
- liv Soll, J., *Ibid.*, p.40. (同書、78 頁)

2017 年 4 月 15 日 銀座交詢社で開催される第 29 回フォーラム(コメンテーター: 片岡泰彦氏)のレジュメより。

The  **ACIOLI**  **SOCIETY**  **JAPAN**

日本パチョーリ協会 〒171-0044 東京都豊島区千早 3-4-2 三代川正秀
Tel. 03-3955-8783 [Email. mpacioli@aol.com](mailto:mpacioli@aol.com) <http://pacioli.world.coocan.jp/>